

---

# 天体観測

やぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天体観測

### 【著者名】

Z95080

### 【あらすじ】

暖かい陽気についてられて、屋上でうたた寝していた。

『馬鹿と煙は高いところが好き』という言葉に当てはまるかどう  
かは分からぬが、俺はこの学校の屋上が好きだ。

暖かい陽気があてられて、屋上でうたた寝していた。

『馬鹿と煙は高いところが好き』という言葉に当てはまるかどうかは分からないが、俺はこの学校の屋上が好きだ。

野球部の掛け声、演劇部の発声、吹奏楽部の演奏。部活動にいそしむ人たちの声が遠くに聞こえる。

時間限定ではあるが、この屋上は誰も入ってくる事がない。たつた一つの入り口に鍵をかけ、先生が鍵を渡さず、俺が錠を解かない限りはこの世界に侵入者は現れない。

だから、俺はこの学校の屋上が好きだ。

俺の好みによって世界を選別できる世界。俺だけの世界。こんな最高の世界を手に入れられたのだから、天文部に籍を置き続けていて本当に良かった。

入学当初は熱意を持つて入部をしたが、あまりの廃れぶりに何度も辞めようと思つた。しかし、この閉鎖された屋上を手に入れてからは、そんな熱意は塵へと変わつた。

元々は天体観測のために鍵を渡されたのだが、その目的を果たしたことではない。これからもその目的を果たすつもりは毛ほどもない。意識が朦朧としている中、この世界の扉が開かれる音が聞こえる。いつものように先生が帰宅するように催促に来たのだろう。しかし、その予想はあっさりと裏切られた。

「こここの学校の屋上すごいよ！ すごいよ！ 景色も最高！」

聞き覚えのない声だった。馬鹿みたいに甲高い声が、けたたましく響く。眠気まなこをこすりながら、騒音の主へと目を向ける。流れるような長髪、まだまだ新しく綺麗な女子の制服が眼に入った。

「君、誰なの？」

一瞬肩をびくっと動かし振り向く。非常に申し訳なさそうに顔を伏せたままだ。

「え、ど、めんなさい。人様がいるとは知らずに大声を出してしまい」

「……だから君は誰なの？」

「本当に、「めんなさい。学校の屋上つて誰もいないものだと思い込んでいたので」

全く話を聞かずに謝罪を続ける彼女に怒りが込み上げてきた。

「だから、君は誰なの？」

彼女がゆっくりと顔を上げる。その顔を見た途端、俺の中の時間が止まった。

「え、その私は一年A組の武田志保です」

少し桃色に染まつた頬。謝罪のためか少し潤んだ瞳。おでこを完全に隠した前髪。その全てに惹かれてしまった。

「恋愛」の反対は「憎悪」ではなく「無関心」である。という言葉を昔とある小説で読んだ事があった。「恋愛」と「憎悪」は対象があつて初めて存在する感情であり、その対象に「関心」がある。しかし「無関心」は対象が自分の世界に存在しなくて発生する感情である。だから、彼女が俺の世界に入ってきた瞬間に、関心が出たのだ。「恋愛」という形で。

「なんでここに来たのかな？」

明らかに、先ほどと全く違う態度。どんどん顔が熱くなっているのがわかる。

「その私、学校の屋上つていつのにすゞく憧れていって、だからその、いつでも屋上を使える天文部に入部しようと思つて、先生から鍵をかりたので」

問い合わせられていくと思つていいのか、彼女はしどろもどろになつていて。不純な動機での入部。もし、入学当時の俺だったなら断つていただろう。しかし今の俺には昔ほどの熱意はないし、惚れた相手を邪険に扱う気もない。

「えーと、天文部に入部希望でいいんだよね？」

「はい！ そうです あなたは天文部の人ですか？」

今までの態度から一変して瞳に活力が宿る。それが俺の胸の鼓動を早める。

「……ああ 一応天文部の部長だよ」

急に彼女は俺の方に詰め寄ってくる。おもわずフェンスまで後ずさりしてしまう。互いに息のかかる距離まで近づく。

「入部いいですか？」

彼女は少し罰の悪そうに小動物のように何かを懇願する田で見上げてくる。。

「いいよ 別段断る理由もないし 歓迎するよ」

俺に彼女の入部を拒否する理由は存在しない。むしろ、入部して欲しいとさえ思っている。

俺は彼女以上に不純だ。

それから、彼女は毎日放課後にこの屋上に来るようになった。彼女と他愛ない話をしながら、日が暮れるまで、まるで望んでいたおもちゃが手に入った子供のように、フェンス越しに空を眺める。俺も彼女が屋上に来るのを楽しみにしている。友人ですら入れることを拒絶した世界に初めて自分の意思で招き入れた住人。その存在がいることを心地良いと感じていた。

蝉が短い命を何かに刻み込もうと五月蠅ぐ鳴り響かせる夏の午後。定期試験も終わりあと数日登校するだけで夏休みという日にも俺たちは屋上に来ていた。暑さから逃れるように日陰で座り込みいつものように空を眺めている。蝉の羽音しか響かない静寂。その静寂を破るように彼女が口を開いた。

「先輩 天文部つて文化祭に参加するのですか？」

「しない予定だけど」

彼女の真剣な顔を見ながら、俺は面倒くさそうな声で否定する。過去一年間、文化祭に参加したことはない。いまさら参加しようといふ気は毛ほども起きない。

「なんですか？ 参加しましょうよ 文化祭」

彼女はふきだす汗を拭いながら、嬉々とした表情で身を乗り出し

て俺の顔を覗き込む。

「参加して何をするの？」

陰鬱な表情が彼女の顔に広がった。何か言葉を紡ごうとしても唇から出てこないらしい。

俺は流れるような動作で横になり瞼を閉じる。彼女も屋上の壁に寄りかかり座り込む。

「もう……文化祭後に転校してしまつから、思い出作りをしたかったのですが 分かりました あきらめます」

心の底から残念そうな聲音で呟く。何気なく聞いていた俺の瞳孔が広がるのが分かる。

「転校？ なんで、どうして、どこに？」

俺は思わず飛び上がり、声が上擦る。

「親の転勤で」

彼女は炎天下の屋上を見ておらず自身の内面を見ていた。言葉には寂寥の響きを帯びている。

「けど、文化祭は先輩が参加したくないなら参加しなくて結構ですよ」

無理矢理笑顔を作り俺に見せる。彼女の瞳には断られたらどうしようという懸念で一杯になつていて。

彼女のそんな悲しい表情は見たたくない。俺は彼女のために何かしようという気持ちが働き始めていた。

「分かった 参加しよう。天文部として文化祭に参加して思い出を作ろう」「うう」

その後、彼女のプラネタリウムを製作したいという提案を受け入れ、俺はすぐさま準備を始めた。しかし、互いにプラネタリウム製作の仕方を知らなかつた。なので、図書館やラインинтерネットで作り方を探し出し、手探りで進めていった。見直すべきところを見つけて、そこを直してまた失敗する。そんな試行錯誤を夏休み中ずっと繰り返し、9月上旬には理科準備室内にプラネタリウムが完成しかけていた。

周りからは「お前が文化祭にここまで熱を上げるとは思わなかつたぞ」やら「廃れた部活に精を出したつて何もならないじゃないか」など色々言われたが、俺はあまりに気にならなかつた。多分彼女に出会つて変わつたのだろう。

そう思えた気がする。

そして、文化祭前日、俺は彼女を天体観測に誘つた。前々から天体観測をしたいと言つていたので、その約束を果たすためだ。待ち合わせ場所はいつもあの屋上。残念というか危険なことに、時計は約束の時間を大分回つている。

はやる気持ちを抑えつつも、遠目に望んでみれば、彼女を容易に発見することが出来た。

これで発見できなければ「ああなんだ。アイツの方が遅刻しているのか、しょうがないな」とでも言えるのだが。

そして、彼女がこちらを向く。笑顔に少し青筋を入れて、彼女が大きく手を振つている。

「すまない。急いだつもりだつたんだけど

「いつものことですからいいですよ」

すぐさま、持参した望遠鏡を組み立て、天体観測を始める。やぎ座、みずがめ座、こじゅうま座、つる座などの秋の星座を順々に眺めていく。彼女は天体観測が終わるまでずっと笑みを絶やさなかつた。肌寒くなつてきた頃に天体観測を終了させ、いつものように地べたに座り込みフェンス越しに空を眺める。

「ありがと」

唐突に彼女が言葉を紡いだ。

「別にいいって」

しひれた首をひねる俺にも構わず、彼女は俺の手を握り締める。

「ううん。本当にありがと」

そのまま別れるまで、彼女は俺の手を離そとしなかつた。別れあと、暖かく残つてゐる彼女の手の柔らかさを感じながらこの満

点の星空を見上げる。

星はいつもと同じように光り輝いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9508o/>

---

天体観測

2010年11月16日12時13分発行